【67】

氏　名（国籍）	朴（ぱく）　熙（ひ）永（よん）（韓　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　4530　号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**上田秋成文学研究** －怪奇の構造と意味－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授		名　波　弘　彰
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	浜　名　恵　美
副　査	筑波大学准教授	博士（学術）	秋　山　　学
副　査	筑波大学准教授		加　藤　百　合
副　査	筑波大学准教授		小　松　建　男

論文の内容の要旨

本論文は，上田秋成の『雨月物語』と『春雨物語』に収められた物語を対象にして，そこでは，人間の本来の姿が，物語世界に構築された異世界でしかとらえられないのはなぜかという問題を，「怪奇の構造」の分析をかいして追究したものである。本論文の構成は，以下のとおりである。

序　章
第一章　「浅茅が宿」の怪奇の構造と主題
第二章　「吉備津の釜」の怪奇の構造と典拠論
第三章　信義から怪奇構造へ――「菊花の約」と「范巨卿鶏黍死生交」との関係をめぐって――
第四章　「蛇性の婬」での「接触と衝突，そして融和」
第五章　異類変身譚の系譜――「夢応の鯉魚」の幻想の構造――
第六章　怪奇の構造の再考――「目ひとつの神」の怪奇の変化――
結　章

序章では，先行研究をまとめ，問題設定をし，さらに論文構成と内容の概略をのべている。

第一章では，「浅茅が宿」が対象とされている。勝四郎が長らく留守をしているうちに，故郷では妻宮木が亡霊となり，妻は夫と再会の際にその心情を吐露する。著者は，そこに主題があるとし，亡霊がどのような物語構造をかいして登場するかを考察している。この作品を構成する二つの空間，夫が行商する近江の国と妻が待つ下総真間の郡とが，位相を異にする空間であると分析している。その際，「闇」「野わけ行く」「狐と梟」といった，伝統的に異世界を指示する語彙が用いられていることを手がかりにしている。ついで，秋成が，男女の至純の情愛の交換を怪奇の世界で実現させていることに着目し，どうして異世界でなければならなかったのかと問う。そして，男女の情愛は，当時の社会では秘められねばならなかったこと，特に女性の情愛の表現は抑制しなければならないという倫理の存在を指摘し，秋成は，その反発から異世界を構築し，

その中で女性に，その情愛を赤裸々に吐露させているとしている。

第二章では「吉備津の釜」を対象とし，それが日本の御釜払いの神事を中国白話小鋭「牡丹燈記」の筋に取り込んだ翻案になっていると指摘し，構造と主題の関連を追究している。「牡丹燈記」では，筋に見られる怪奇が日常の次元と連続しているのに対して，秋成の作品は，伝統的に異世界を指示する語彙を散りばめ，二元化した空間構造を構築しているという。ついで，秋成は，正太郎と遊女が隠れ住んでいた家を異世界化することで，亡霊の妻磯良が登場し，長年の嫉妬の情と憎悪の念を夫に投げかけ取り殺すことを問題化している。著者は，そこに近世社会の倫理への反発があるとし，異世界の中に磯良を登場させ，日常世界では抑圧せざるをえなかった嫉妬と憎悪をあからさまに解放させているという。

第三章では，「菊花の約」が，忠実に中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」を典拠としていると指摘したうえで，中国白話小説では二人の友人間の信義が語られているのに対して，秋成の作品では，主人公の信義が敵対する二人の男性間で引き裂かれていると解釈し，この悲劇性が，作品結末で加えられた白話小説にはみられない『史記』の公叔痤の説話といかに結びついているかが考察されている。第一章と第二章の女性の性情をめぐる考察をもとに，「菊花の約」では，現実において信義が破れる事態が生起しても，それは死を賭してでも守らねばならないとするのが秋成の倫理観であったとしている。そして，秋成は，異世界を構築し，現実では実現しえなかった信義をそこで実現させることによって，主題と異世界を結びつけた，と結論づけている。

第四章では「蛇性の婬」を対象とし，中世の縁起と白話小説が，秋成作品の構造と主題にどのようにかかわっていたかを考察している。秋成は，女性の蛇体化というプロセスを物語の外部に追いやり，男女の愛欲とそこからの覚醒の物語に仕立てていると指摘し，ついで蛇霊の世界はどうなったのかと問い，秋成は，女性の「蛇性」を内面化させ，それを女性の愛欲の不条理性へと転換させた，と解釈している。そして，怪奇を実体としてではなく人間の性情の比喩と認識しようとする秋成は，縁起の信仰から人間の物語へと作り替える際に，中国白話小説に見られる通俗性を重要な媒体としたともいう。

第五章では，「夢応の鯉魚」を対象としている。僧徒で絵師の主人公にとって，幻想世界の構築はいかなる意味を持ちうるのかと問い，そこには芸術の自由の問題があったという。さらに，『荘子』にある荘子と恵子の「魚の楽しみ」の問答，それに荘子の胡蝶の夢の寓意との比較をかいして主題追究を行い，夢と仮死の中で描かれた幻想世界は，『荘子』的な物化の世界として描かれており，芸術の自由はその世界に属し現実の世界とは無縁であるように，作者は提示しているとしている。絵師は漁師の釣針にかかり人間世界に戻され，絵師の物化の世界の夢想は霧消する。著者は，この二元的世界の幻想世界に主題が設定されており，それは，人間が束縛と自由の両極端の狭間であえて生きる存在であることを自覚せねばならない，というものであるとしている。

第六章では，『春雨物語』の唯一の怪奇物語である「目ひとつの神」が考察の対象となっている。都にのぼって歌道の修行を志した若者が，近江の歌枕である老蘇の杜で百鬼夜行と鬼の酒盛りを目撃し，身の危険を感じ隠れたが，目ひとつの神にみつけられてしまう。しかし殺されることなく，歌というのは人間の性情の吐露にあるのであって，形式にあるのではないと諭される。そこから，この作品には，中国白話小説の翻案ではない構造が確認され，そこに，当時すでに国学に傾斜していた秋成の姿勢が見られるという。

結章では，本論文の総括をし，今後の研究の展望についてのべている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，比較文学的アプローチをとり，上田秋成の文学の構造と主題を追究したものである。その追究の際，日本の物語文学の伝統と，近世に入って数多く舶載され，ストーリーの奇抜さや趣向の面白さを徹底

的につらぬくことで大衆娯楽小説として商品価値を高めていた中国白話小説とが，どのように文脈を織り成していたのかを考察している。

秋成文学研究はすでに多くの蓄積があるが，その先行研究では，秋成文学が，物語文学の伝統と中国白話小説との結びつきによる翻案小説であるという理解は共有されてはいるものの，両者を別個に論ずる場合が多い。こうした現状をふまえ，比較文学的な方法をとった本論文は，秋成文学の主題が，どうして虚構の物語として構築される異世界の中でしか実現しえないのかという問題を，作品の構造分析をかいして追究している。その問題設定と採用した方法は，中国白話小説の通俗性ないし大衆娯楽性と，物語文学における怪奇の趣向を十分に理解していることによって説得力をもち妥当なものとなっている。

とりわけ第四章の「蛇性の婬」をめぐる追究は，この作品が，女性の愛欲をめぐる主題と怪奇の結びつきを，中世の宗教ドラマとして名高い道成寺縁起の筋立てに依拠させつつ，女性が蛇霊の正体をあらわすといった宗教ドラマの核心を自らの外部に追いやっていることに着目し，怪奇の世界を物語の枠の中に構築するのではなく，女性の内面へと組み込んでいるととらえている点で傑出している。また，その追究により，宗教から人間への移行にこそ，中世から近世への文学史の展開が見通されるという認識がえられ，近世文学の代表作と目される「蛇性の婬」の高い文学性が証明されてもいる。さらに本論文は，「怪奇の構造」という課題を一貫して追究し，しかもそれぞれの作品分析においては，主人公の性別・身分・職業などによって主題の変奏をとらえ，秋成文学の多彩な世界を記述しえていることも評価すべき点である。

ただ，比較文学研究としては，いささか不満足な点ものこる。特に，中国白話小説の書誌的研究が，一時代前のものに依存して議論されていることは惜しまれる。

このような研究の余地を残してはいるものの，それは本論文の価値をさほど損ねるものではない。特に，秋成文学の主題と構造の把握において，的確で独自な解釈をおこない，著者自身が設定した課題を真摯に追究し，学界にあらたな成果をもたらしたことは明らかである。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。